

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:49-50.

外来化学療法を受けるがん患者のセルフケアに関する文献検討

澤田 彩, 西川 佳那

# 外来化学療法を受けるがん患者のセルフケアに関する 文献検討

澤田 彩 西川 佳那  
(指導：及川 賢輔)

## 緒 言

近年、副作用に対する支持療法の発展、看護師による副作用対策の普及、包括支払制度の導入による在院日数の短縮化、診療報酬の改正などの医療・社会の変化が外来化学療法の普及を促進する因子となり<sup>1)</sup>、外来で化学療法を受けながら在宅療養を続けるがん患者が増加している<sup>2)</sup>。

外来化学療法によって、患者の QOL が大きく向上した一方で、患者自身が主体的に副作用への対処をはじめとしたセルフケアを行うことが求められている<sup>3)</sup>。このことから、外来看護師には、外来化学療法を受ける患者の安全や治療の継続を支援していく責務があり<sup>4)</sup>、そのために患者のセルフケア行動向上のための援助が必要となる。

本研究は、文献検討を行い、外来で化学療法を受けるがん患者への看護の示唆を得るために、外来で化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動の実態について明らかにすることを目的とする。

## 用語の定義

外来化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動：自分の安寧のために、がんや化学療法に伴い引き起こされる症状に対して周囲の支援を受けながら自分自身や環境を意図的に調整する行動<sup>5)</sup>。

## 方 法

### 1. 研究対象

文献を対象とした文献検討である。医学中央雑誌 web を用いて、検索式は「がん」and「化学療法」and「セルフケア」and「外来」で、絞り込み条件は「抄録あり」、「原著論文」で検索した。結果、318 件であった。その中から、外来化学療法患者のセルフケアについて記載されている 3 件を対象文献<sup>6)~8)</sup>とした。

### 2. 分析方法

各文献で述べられているセルフケアに関連する要因を抽出し、内容を要約、コード化し、類似性に沿ってカテゴリー化して分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

先行して行われた研究を引用・参照した場合には、引用・参照した文献の出典を可能な限り明示する。

## 結 果

研究対象の 3 件の文献は、いずれも質的研究であった。それらに対し文献クリティークを行い、セルフケアの実態に関するコードを抽出しカテゴリー化した(表 1)。文中では、カテゴリーを《 》で記述する。

表 1. 外来化学療法を受けるがん患者の  
セルフケア行動

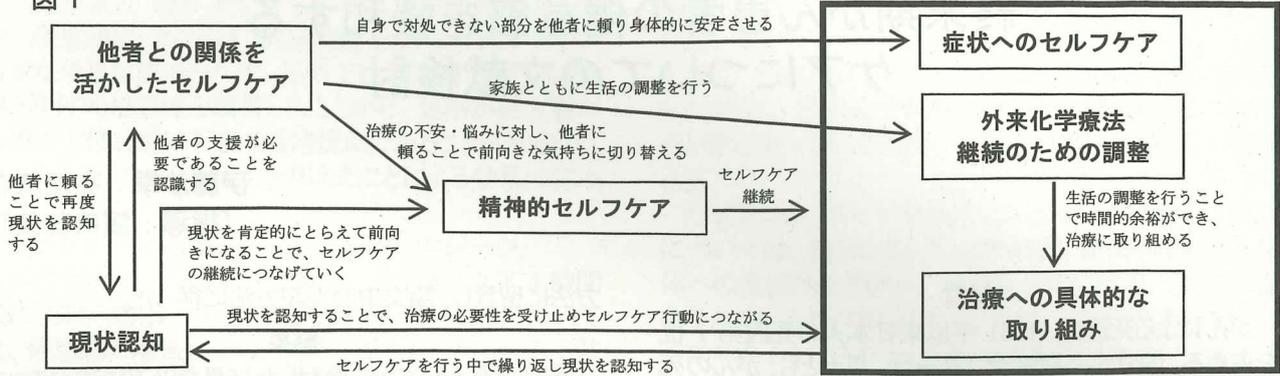
カテゴリー	文献
症状へのセルフケア	6).7)
精神的セルフケア	6).7)
他者との関係を活かしたセルフケア	6).7).8)
治療への具体的な取り組み	6).7).8)
外来化学療法継続のための調整	6).7).8)
現状認知	6).7).8)

## 考 察

### 1) セルフケア行動

がん化学療法を行う患者は、原疾患に起因する症状の他に、化学療法の副作用による症状に自身で対処しなければならず、《症状へのセルフケア》が重要となっているといえる。そして、外来化学療法は治療が長期にわたること、医療者から直接ケアを受ける時間が限られることなどから不安やストレスを感じやすいと考えられ、その中でも気持ちを前向きに切り替え、治療を継続していくために《精神的セルフケア》が大切であるといえる。また《精神的セルフケア》の基盤となるのは、患者自身の総合的なセルフケア能力であるという<sup>6)9)</sup>。《他者との関係を活かしたセルフケア》は、家族や医療従事者と共に生活する中で行う身体的な安定のための調整である。患者を取り巻く周囲の存在・態度は、セルフケア行動促進因子の一つで、意思決定に十分な情報が得られているという安心感と支えがあるという心強さを実感することに繋がる。家族とだけでなく、社会的安定のために療養と生活の折り合いをつけるセルフケア行動《外来化学療法継続のための調整》は外来化学療法患者特有のセルフケアカテゴリーであるといえる。《治療への具体的な取り組み》は患者が日常生活の中に新たに組み込んで行われているものであり、自己管理の必要性を理解し、患者が主体的に生活を送りながら取り組んでいる行動であるといえ、患者の生活行動に密着している点において外来患者特有の行動であると考えられる。

図 1



オレムのセルフケア理論によると、セルフケアリングの過程は、自分の健康状態を認識することから始まる<sup>10)</sup>。従って、セルフケア行動過程の出発点に《現状認知》が位置している。先行研究によると、症状の原因や予測される副作用の種類、時期などの情報獲得は、《現状認知》をはじめとするセルフケア行動の動機として重要な要素であるという<sup>6)</sup>。

## 2) カテゴリー間での関連 (図 1)

化学療法の過程では、思うように効果が現れず、副作用に苦しめられるため、《精神的セルフケア》が必要となる。《精神的セルフケア》を行っていくためには他者の存在が必要不可欠であることから他者の支援が必要であることを《現状認知》することで《他者との関係性を活かしたセルフケア行動》に繋がっていく。その過程を乗り越え《現状認知》を繰り返すことによって、治療効果が得られない場合も、気持ちを切り替えて治療継続に繋げていくという、カテゴリーの関連性がみられた。また、《症状へのセルフケア》を行う中で患者が行動に限界を感じた際に、不足する行動を他者に頼り、補うという《他者との関係性を活かしたセルフケア行動》を行うことで身体的に安定させることができるため《症状へのセルフケア》を十分に行っていくためには《他者との関係性を活かしたセルフケア行動》が欠かせない関係であるといえる。外来化学療法を行う患者は家族と共に生活しながら治療を行っており、《外来化学療法継続のための調整》を行う際は家族の生活にも少なからず影響を及ぼすといえる。よって、適切に《外来化学療法継続のための調整》を行っていくためには家族などの周囲の人々の理解や支援が不可欠であり《他者との関係性を活かしたセルフケア》があることで、患者の個別性にあった《外来化学療法継続のための調整》が行えるといえる。さらに、《外来化学療法継続のための調整》が適切に行われることで患者の生活に余裕が生まれ、《治療への具体的な取り組み》を生活の中に組み込むことが可能となると推測される。

## 3) 外来化学療法を受ける患者のセルフケアを支える援助

看護師は、《精神的セルフケア》と《現状認知》支援するために、現状を一緒に確認していきながら、感情の変化に対して感情表出を促すなどの援助が必要であると考えられる。看護援助としては、治療によって副作用が予測できるため、事前に患者が副作用の症状や対応方法を理解することで確実に身体的に安定した状態を得られるように情報提供を行うなどの予防的行動を支えることや、患者が副作用への対応に限界を感じた際に他者を頼りながら副作用に対応できるように看護介入していく必要がある。苦痛の緩和・予防できるという認識と治療に対する満足感を、患者自身が持つことが、セルフケア行動を促進する大きな要因となる<sup>8)</sup>。

化学療法を受けているがん患者のセルフケア促進要因を抽出したところ、長期にわたって外来でがん化学療法を受けている患者の特徴として不安の緩和、闘病意欲の継続などの日常生活を調整するための情報の重要性が明らかになった。看護としては患者の特殊性やニーズを把握したうえで患者家族への情報提供や教育を実施することでセルフケア行動のための環境調整を行っていく。そのために、患者家族との信頼関係の構築が重要である。

## 参考・引用文献

- 1) 有吉寛:なぜいま化学療法か, がん看護, 8(5), 348-352, 2003.
- 2) 平成 26 年(2014)医療施設(静態・動態)調査・病院報告の概況:厚生労働省
- 3) 濱口恵子, 本山清美編, 田中登美著:外来がん化学療法における看護, がん化学療法ケアガイド, 東京, 中山書店, 2007, 202-212
- 4) 長場直子, 木村茂樹編:Nursing Mook 32 がん化学療法の理解とケア, 学習研究社, 2005, 124-131
- 5) 本庄恵子:壮年期の慢性病者のセルフケア能力を査定する質問紙の開発—開発の初期の段階—, 日本看護学会誌, 17(4), 46-55, 1997.
- 6) 飯野京子, 小松浩子:化学療法を受けるがん患者の効果的なセルフケア行動を促進する要素の分析, 日本がん看護学会誌, 16(2), 68-78, 2002.
- 7) 篤永望美, 船橋眞子, 京泉由美子他:外来化学療法を受ける膀胱がん患者のセルフケアを支える援助, 日本看護学会論文集, 成人看護 11(42), 179-182, 2012.
- 8) 布川真記, 古瀬みどり:外来化学療法患者の治療継続過程におけるセルフケア行動, 日本看護研究学会雑誌, 32(2), 93-100, 2009.
- 9) 齋藤智子, 佐藤富美子:外来で化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動と自己効力感の関連, 日本がん看護学会誌, 24(1), 23-34, 2010.
- 10) スティーブン J. カバナ訳) 数間恵子他:看護モデルを使う①オレムのセルフケア・モデル, 医学書院, 20, 1995.